

佐々木裕子氏インタビュー

2022年10月16日(日) 15:00～

場 所：佐々木裕子氏宅（東京都文京区湯島）

参加者：入江良郎、紙屋牧子、岡田秀則、大傍正規、佐崎順昭、笹沼真理子、本地陽彦

本地陽彦(編集)

笹沼真理子(文字起こし、整文)

◎はじめに

佐々木裕子氏は、塚田嘉信氏の令妹(次女)である。昭和10(1935)年4月14日のお生まれで、昭和4(1929)年生まれの塚田嘉信氏とは、5歳(5年半)違いである。塚田嘉信氏資料の寄贈者であり、また私たちがインタビューした時点では、前年に末弟の昌宏氏も亡くなられたとのことで、ご兄弟では佐々木氏お一人がご健在ということであった。

インタビューは当初、2022(令和4)年の8月中にも実施を予定していたが、新型コロナの感染拡大の影響から延期を繰り返して、ようやくこの日になって佐々木氏のご自宅を訪問して実現した。実施に当たっては、塚田嘉信氏と親交のあった本地が主となって55項目にわたる質問事項を作成し、事前に佐々木氏宛てに送付しておいた。その際、当日の録音、及び今回のこのインタビューを活字化したものを、当日撮影した写真と共に本「成果報告書」に収録することに就いてもご了解を頂いた。当日は、その質問書を元にしてのインタビューの為、本地による発言、質問がメインとなっている。

質問事項は、「塚田家のご出身に就いて」、「上京後の塚田家、及び嘉信氏の幼少期に就いて」、「嘉信氏の中学校時代に就いて」、「大学進学と、それ以後の嘉信氏20代前半に就いて」、「キネマ旬報社から松竹株式会社」といった大きな項目で区切り、従って資料の極めて少ない塚田嘉信氏の前半生を主に取材することとした。

活字化に当たっては便宜上、実際の発言で「塚田さん」としているものは「嘉信さん」、「裕子さん」としているものは「佐々木さん」で統一した。インタビュー原稿は、可能な限り当日の「雰囲気」をも伝えることを目的とした為、このインタビュー主旨から逸れた発言を割愛した以外は、必要以上の整理をせず、またその内容に就いても飽くまでも当日の発言を尊重して、これも考証を加えなかった。

インタビュー

◎塚田家の前歴、など

紙屋 先日、お手紙でご質問させて頂きたい内容をお送りさせて頂きました。今日は、だいたいそれに沿ってお話をお伺いしたいと思います。

佐々木 ええ、頂きましたけれど、先ずはこれをご覧いただくと思ひましてね。うちの父親がこういうのを…(「私の一生 塚田松司著」と表紙に書かれた御尊父の大量の手書き原稿を取り出す)。「私の一生」なんて書きちゃって…(笑)。



佐々木裕子氏。テーブルの上は「私の一生」草稿の一部。
撮影・本地陽彦

一同 おお～、すごい。

大傍 こういうものがあるんですね。家紋も入ってます。

佐々木 ええ、どういものかしら、うちには系図はあるけれども戸籍謄本がないんですよ、空襲で焼けちゃったみたい。

紙屋 これはお父さまが書かれたのですね。いつ頃から書かれたんですか。

佐々木 「大正12年」頃のことからですか、ここに書いて…。

入江 嘉信さんのことも出てくるんですか、お生まれになった時のこととか。

佐々木 そんなに出てないの、子供のこと父親はほったらかしなのよね(笑)。

紙屋 お写真もたくさんありますね。



「私の一生」に貼り込まれた家族写真。松司氏の自筆で「昭和拾八年正月」と添え書きされている。
後列右より、松司氏、嘉信氏。前列右より、次男精司氏、松司氏母もと氏、三男昌宏氏、松司氏妻静子氏、次女裕子氏。

佐々木 うちの祖父が質屋やってたというのは知ってた？

一同 いえ。

入江 是非そういうお話を…。

佐々木 質屋っていうのをすごく嫌がっているところがあってね。塚田家はもともと前田家(加賀藩前田家)と一緒にくっついて新潟から上京してきて、この辺りで米屋をやってたんですよ。ちょうどこのマンションの通りに駐車場がありますが、その向こう側に塚田の本家があったんです。それでこの辺はすごく土地が固いため、当時は室(むろ)がいっぱいあったんです。その室で、米屋の職人さんがいっぱい仕事をしていました。父は二人兄弟だったんです。祖父には姉がいて、その姉の方が本家の米屋を引き継いで、祖父が質屋をやっていたんです。祖父は一人息子でしたが、長女が家業の米屋を継いだんですね。祖父は浅草の質屋に奉公に出て、やがて分家となり、新しく別に質屋として独立したんです。

紙屋 いまお話になったようなことはこの「私の一生」に書かれているんですね。

佐々木 私は祖母から聞いたりして知ったんです。祖父が質屋やっていたとき、新潟から12歳の子供が名札を付けて上野の駅にきて、うちで丁稚奉公をしたんです。一生懸命働いて独立して、一流になった人がいたんです。その人が後に古銭の本も出されてね。それがこの本(『日本古貨幣変遷史』小川浩著/日本古銭研究会1983年)です。

本地 それで古銭の本があるんですね。実はアーカイブに頂いた塚田さんの資料の中に古銭の本が何冊かあって、嘉信さんは古銭を集める趣味は無かった筈だがなあって思っ…。

佐々木 そう、兄じゃなくて、その丁稚だった子供がすごく古銭の勉強されたんでしょうね。

佐々木 でもこういう父の手記は、どうしたらいいんでしょうね。

入江 この「私の一生」は、お父様ご自分でこのように作られたのですか。

佐々木 もちろん。

入江 こんなに大量に！

佐々木 几帳面だったのよねえ。

紙屋 お父様の名前の読み方は「しょうじ」ですか。

佐々木 「まつじ」です。

本地 「まつじ」と濁っていいんですね。

佐々木 ええ、「まつじ」。兄から古銭の話聞いたことはありますか。

本地 ありません。

佐々木 うちの兄は何にも言わないと思うの(笑)。

本地 私がここへお邪魔したり、外でお会いしても…。

佐々木 うちのことは言わないでしょ。

本地 ええ、僕も聞きもしませんでした。いつも二人で古い本の話と、映画のことしか話ませんでした。

佐々木 そうでしょうねえ。

岡田 前田家と言えば、東大本郷の辺りはもともと前田家の屋敷でした。

佐々木 そうそう、それで近かったので出入りの米屋をやってたんです。うちの祖父は分家して質屋をやっていたんですが、東大生って今はお金持ちの人が多いいんでしょうけれど、当時は学生さんも貧乏で勉学に励んで、質草をよく入れたりしたんですね。結構学生さんがお客さんとして来ていたんです。関東大震災のときに、全部焼けてしまって蔵だけが残ったんですが、その蔵にお客さんの質草をに入れていたので、全部助かったって喜んだらしいんです。

紙屋 お父様の手記は「関東大震災で蔵だけが残って…」というところから始まっていますね。

佐々木 そう、それで震災が済んで、この辺りも区画整理されました。区画整理の前は色んな商店があつて賑わっていたらしいんです。うちからちょっと先へ行くと銭湯があつて、夕方になると下駄履いてお風呂に行くっていうような感じでしたね。でも、みんな亡くなって。兄弟のなかで女一人だったから、おばあちゃんの親戚のうちに行つて暮らしたりして…。

本地 新潟のご出身ということでしたよね。湯島に出て来られたのはいつ頃なんですか。

佐々木 それがわかる戸籍が無いのよね。空襲で焼けちゃつたっていうんです。

本地 松司さんは湯島で生まれているんですか。

佐々木 もちろん。祖父もここで生まれています。その何代前かわかりませんが、新潟から前田家と一緒に米屋の出入りで出てきた（「私の一生」には、「加賀前田百萬石の御出入米商人として家代々米商を営み」と記述されている。本地注）と聞いています。

本地 前田家のお抱えだったんですか。

佐々木 その辺は子供だったからよく聞いてないんです。

岡田 ここ（「私の一生」）には、塚田家の初代の方が明治5年にお亡くなり、と書いてあります。

本地 いまでも新潟にご親族がいらっしゃるのですか。

佐々木 いえ全然判りません。

紙屋 お米屋さんの屋号ってお聞きになったことはありますか。

佐々木 屋号までは聞かなかつたですね。質屋は「伊勢屋」って書いてあつたわね…。

大傍 この「私の一生」に、「伊勢屋」って屋号が書いてありますね。

本地 このお父様の手記は当然、嘉信さんもお読みになつてますよね。

佐々木 読んでないでしょ、こんなにいっぱいあつたらいやになつちゃうんじゃない（笑）。自分のことばかりなんですもん、「私の一生」ですから（笑）。

入江 嘉信さんならお読みになつているんじゃないかと思いますが。

紙屋 内容的に一緒のものが別にありますね。

笹沼 凄いですね。原本のような下書きがあつて、それをさらに清書されているんですね。序文まであつて、ここまできちんと書かれてすごく貴重です。

本地 驚いたね。

大傍 これはお借りすることができますか。

佐々木 構わないですよ、兄弟は私しかいないんだから。

入江 最初にすごいものが出てきましたね。

本地 いきなりこれだと、ちょっと前に進みにくいね…。

佐々木 どこまで発表していいか判りませんが…。

本地 寄贈して頂いた中に、松司さんの湯島小学校のたぶん卒業式の写真だと思うんですが、岡田嘉子が一緒に写っているんです。

佐々木 ああそうなの。

本地 クラスが一緒かは判らないんですけど、同学年だったようです。この話はお聞きしたことはないですか。

佐々木 私は聞いてない。

本地 お父さまも湯島小学校ですね、嘉信さんのご兄弟も皆さん湯島小学校ですか。

佐々木 私だけ違うの。私は疎開先の飯坂温泉で卒業したんです。

本地 嘉信さんは湯島小学校の前は、いまでいう幼稚園みたいなところへは行かれていたんですか。

佐々木 ちょっと判らないわね、年が離れていて。兄は4年生まれでしょ、私は10年生まれだから。

◎福島、飯坂の中学時代

本地 嘉信さんのいちばん古い記憶はいつ頃からありますか。

佐々木 飯坂に行ったときかしら。兄は、中学は飯坂の福島中学だったと思うの。飯坂温泉ってその当時はすごく華やかだったんです。今は下火になってしまって当時のような雰囲気は全然ありませんけれど。

本地 飯坂は、向こうにご親族がいらしたからなんですか。

佐々木 うちの祖母の兄弟の姉などと一緒にいたの。

本地 戦争中のことですよ。

佐々木 疎開ですからね。兄は福島中学で三人友達がいって、いつもその三人と一緒にでした。一人は花水館(かすいかん)といって、飯坂でも一流の天皇陛下がお泊りになるという宿の確か次男坊かな。あと一人は泉洲閣(せんしゅうかく)といって、小川に朱塗りの橋が架かっているところがあって、その橋を渡ったところにある宿。そこのやっぱり次男坊だったかな。そこは佐藤紅緑の定宿だったらしくて、いつも来ていたという話は聞きました。

本地 嘉信さんは福島へ行かれる前に、第三東京市立中学校に入学されているみたいですが…。

佐々木 そういの全然知らないの。

本地 その時に結核になったということですが。

佐々木 結核にはなったの、すごくて。結核になって吐いたりしていたんですが、母が嫌な顔をせずいつもその吐いた洗面器を片付けていました。それがその中学のときかはっきりしないけれど、そういう兄の姿は記憶に残ってますね。

本地 そうすると結核の為に疎開したということではなくて。

佐々木 そうではなくて、ですね。

本地 この時期の嘉信さんは、中学を一年間お休みされたということなんですけれど。

佐々木 そうなんです、私はその辺は判らなくて、本地さんの方が良く判ってるわね(笑)。

本地 そうすると嘉信さんはどこか療養所や病院に入っていたということは無かったんでしょうか。

佐々木 そういふことはしていなかったと思います。当時はそういう所も余り無かったでしょ。

本地 嘉信さんはそういう具合にお身体も弱かったと思うんですが、福島でものすごく映画を観に行っているんです。

佐々木 よくプロマイドを集めたりしていましたね。

本地 嘉信さんご自身でノートに控えられていて、何々を観たとびっしり記録されてるんです。それを見るとすごく元気な方だったみたいで(笑)。

佐々木 その時は温泉地の環境が良かったのかな。

本地 福島で嘉信さんが映画館に行っていたというご記憶はないですか。

佐々木 全然無いです。私は小学校3年の夏休みに疎開したから小さくて。

本地 でも、疎開先の福島では嘉信さんとご一緒だったんですよ。ご家族全員が行かれたんですか。

佐々木 そうではなくて、私と弟とおばあちゃんと一緒に、父と母はときどき来るという感じでした。

本地 松司さんはここ(湯島)のほうが多かったんですか。

佐々木 そうですね、疎開先ではおばあちゃんが全部世話をしてくれていました。そのおばあちゃんが大晦日の日に亡くなったの、だから大変だったみたい、お正月が出来なくて…。

本地 そうでしたか。あと、戦前に家に映画を映す映写機があったことを嘉信さんにお聞きしたことがあるんですが…。

佐々木 それは判らないけれど、蓄音機はありましたよ。ですから映写機もきっとあったんでしょうね。

本地 嘉信さんは中学を福島で卒業されているんでしょうね。

佐々木 でしょうね。

◎敗戦後、日大へ

本地 中学の卒業は昭和23(1948)年3月だと思います。戦争が終わってもまだ福島に残っておられたんですか。

佐々木 ここ湯島のバラックの家が出来るまでね。私が飯坂で小学校を卒業してからこっちに戻ってきたの。

本地 戦前のここのお住まいは空襲で焼けてしまったんですね。

佐々木 もちろんそう、焼夷弾が落ちて残っていた蔵も焼けちゃいました。だから大震災のときに区画整理しましたでしょ。そのときに焼け残った蔵を曳家っていうんですか、移動させて家を建てたの。

本地 すると嘉信さんは福島で中学を卒業されて、東京へ戻って来られたということですね。日大の芸術科に入るのは、中学を卒業してこちらに戻って直ぐでしょうか。

佐々木 その辺は、私よく判らないのね。もっと聞いておけばよかったけれど、小学生だったからね。

本地 残っている資料を見ますと、入学が二年生からみたいなんです。だから学制の制度が変わるときにぶつかって、ということなのか。

佐々木 その当時は混乱していた時代だから、よく覚えていないんです。

本地 嘉信さん自身も履歴書のようなものは書いて残されてないですね。

佐々木 そうね、残ってないからね。

本地 調べた限りでは、中学を卒業されてまた一年ブランクがあって、それから日大に入られたみたいなんです。その一年のブランクの間は何をされていたのか判らないんです。

佐々木 私にもよく判らないですね。

本地 日大も中退をされますよね。

佐々木 ええ、それもやっぱり結核じゃないかな。でも、その時もよく友達と三人でいましたね。一人は釘持さんという日暮里の質屋の息子さん。もう一人は日大を卒業して九州の民放に勤めたという人がいました。そういう話を兄から聞いた記憶はありませんか。

本地 無いですね。ただ、釘持さんという方はお葬式の時に参列されてまして、私もお挨拶させて頂きましたが…。

佐々木 釘持さんは歯の関係のお仕事だったかしら。映画関係では無いみたい。

本地 頂いた名刺には「東京歯研・事務長」とありました。私もお仕事の内容は知りませんが、日大のときにご一緒だったということでした。

佐々木 そうそう、そうなの。

本地 亡くなられた時、釧持さんに御連絡されたのはどなただったのでしょうか。

佐々木 なにしろ、彼はしょっちゅうここへ来ていたんです。一緒に夕飯食べたりね。

本地 そうすると釧持さんには佐々木さんもお会いになっているんですか。

佐々木 そう、しょっちゅう来ていましたから、夕飯時も一緒でした(笑)。

本地 そこまで親しくされていたんですか。

佐々木 それと、うちの母の友達に「若草」(劇団若草。1949年創立の児童劇団)の方がいて、いちばん忙しい「警察日記」の時代の頃だったと思うの。今のように食べる場所もないから、回りもちで劇団の子供を預かっていたことがあるんです。そのときに若草の深山容子(みやまようこ)さんもうちに一緒に来ていて、「どうしてこんなおばさんばかりのところに来るの?」って聞いたことがあるんです。そしたら「ここがいちばんいいんです、なんかすごくホッとするんです」って(笑)。普段は緊張しているのかしらね。その人の旦那さんが古川ロッパ一座の戯作者(上山雅輔・かみやまがすけ)をしていると言っていたかな。

本地 そうでしたか。あと嘉信さんは、日大と別に東洋大学に入られた記録があるんですが。

佐々木 知りません。この前に頂いた資料を見て初めて知りました。

本地 そうですか。

佐々木 なにしろうちの親って全然放任主義で、私は私で柔道やっていたり、みんなそれぞれでしたから。

本地 大学を辞められた頃も結核で身体が弱かったんでしょうね。

佐々木 そうでしょうねえ、弱かったですね。

本地 子供のころから身体が弱かったんですね。

佐々木 そうね。

◎職探し、就職、そして映画の道へ

本地 昭和30年くらいになって、キネマ旬報社に入るんですが、そこも1年くらいで辞められてます。

佐々木 ええ、お手伝いしていましたね。勤めていたというか、その後は松竹にも行っていましたでしょ。

本地 それから、今で言うハローワーク、職業安定所に嘉信さんは結構通われてて、お仕事探されてたみたいです。

佐々木 そうですか。それは全然知らないです。

本地 就職難だったのかなと思ったんですが…。

佐々木 その頃、兄は苦労してたんですね。

本地 何度も通われている書類が残ってます。

佐々木 そうなんですか。定職にも就かないから親が心配してました。

本地 面接に行っても断られるようなこともあったようですね。

佐々木 でも、あんまり勤め人にはちょっと合わないわよね(笑)。

本地 そうですね(笑)。

入江 ご兄妹で「今、何してるの?」なんていうお話などはされなかったですか。

佐々木 そんなにしないわね、聞いたら傷つくかなって、みんなそう思ってるようなところもあったかな。

本地 ご兄弟の中で嘉信さんだけが仕事に就けなかったと言いますか、就職しなかったということになりますか。

佐々木 就ける仕事が無かったというかな…。うちの父親は早稲田に入って支那語を習って、満州に行きたいという思いで一所懸命学んでた。でも、妹に母を預けてやっとなんか自分満州へ行けるといふ矢先に母が亡くなっちゃって、もうやる気を無くしてしまったようなことがあったから、私たち子供に対しても、あれやれこれやれ、あれやっちゃだめとか一切言わなかったです。自分の好きなようにしろって。だから兄も好きな映画の方へ行っただけでしょうね。

本地 ご兄弟とかご家族で、嘉信さんと一緒に映画を観に行くようなことはありましたか。

佐々木 行かない行かない(笑)、行ったことない。

本地 嘉信さんがそもそも映画に興味を持った切っ掛けって何だったんでしょう。

佐々木 何でしょうねえ、なにしろここは花柳界だったから、芸事が身近にあったりしたからでしょうかね。

本地 ご自身は、身体が弱くて暇だったから、みたいにおっしゃってますが…

佐々木 そんな感じもあったでしょうね。

本地 例えば家族とごはん食べているときに映画の話をするようなことも無いですか。

佐々木 そういう話はうちではしなかったみたい。話しても判らないって言うからかしらね。

入江 逆に嘉信さんが、映画がすごく好きなんだなって気付かれた瞬間はありますか。

佐々木 子供の時からプロマイドみたいなものとか集めてたからね。

本地 ご兄弟の方が映画雑誌を揃えるのを手伝ってらっしゃったみたいですね。

佐々木 弟ね、古本屋さんに行って買ってこい(笑)と言われて、買って来ては本を外に出して、よく日光干してました。その弟も去年亡くなったから…、弟が生きていればその話も出来たかも知れませんが。

本地 昌宏(まさひろ)さん。

佐々木 そう。

本地 三男の方ですね、亡くなられたんですか…。

佐々木 そう三男、私の弟ね。

佐崎 嘉信さんの雑誌に「昌宏」って名前が書いてあるのがあります。

佐々木 あるの？そうですか！ しょっちゅう使われてたみたい(笑)。

本地 なるほど、使えばしりみたいに(笑)。

佐々木 そう、しょっちゅう古本屋さんね。

本地 昌宏さんも一緒に映画に興味があってということではなくて。

佐々木 じゃなくて、でしょうね。興味があるのかないのかそこまでは聞きませんでしたけれど。

佐崎 嘉信さんは買った日付を必ず書かれているんですね。

佐々木 そう、なにせ几帳面なのよね。

本地 映画を観るのもきっちり記録を残されるんですけれど、そういう性格というか、几帳面さはお父様譲りなんですね。

佐々木 そうかも知れない。父もですが、兄も書くのが好きでしょ、直ぐささっと書きちゃう。

本地 お父さん譲り、ね。

大傍 お父様の字がお綺麗なのは、書道かなにか習っておられたのですか(「私の一生」に、「尋常一、二年の頃下谷西黒門町の書家中根半嶺先生の門に最年少者として書道の勉強に入門したので今日でも多少毛筆を持つことの出来る原因である」と記述がある。本地注)。

本地 昔の人は学校で厳しく習ったりしていたからかな。

佐々木 そうでしょうね。

佐崎 嘉信さんが映画以外では、学校で好きな学科とか、例えば国語とか、算数とか、ありますか。

佐々木 兄は私にはそういうことも話さないのよ、弟には話したかも知れないけれど…やっぱり弟にも話してないかな。

佐崎 書かれることはお好きだったんですね。

佐々木 書くことはもう。

佐崎 嘉信さんはお父様がこういう「私の一生」を書かれていたというのは知っておられたでしょうか。

佐々木 見てないんじゃないかな、多分。でも、その辺も判りません。

本地 こういうのを書いたから読んでおいて、というようなこともお父様はおっしゃってなかったんでしょうか。

佐々木 無いです。父が亡くなったあとで整理したときに出て来て、ええって驚いてね。

笹沼 これだけきっちり書かれていながら、それについて何も言わないで亡くなられるというのは意外ですね。読まれることを前提としていて、遺そうという意思がすごく感じられる作りなので、余計にそう思います。

佐々木 われわれがちょっと無関心だったのよね、親に対してね(笑)。

本地 亡くなられたのは嘉信さんと同じ年でしたね。

佐々木 そう一緒でした。置いて行ってもかわいそうって、同じ月に亡くなったのかも、と話してました。

本地 あと、立ち入ったことですが、私が一番最初にお訪ねした時はマンションになる前の家だったんですが、このマンションの敷地というのは塚田家のものとしてずっと変わらずにあるんですか。

佐々木 ええ、変らないです。

本地 何軒か他にも家が建ってましたね。

佐々木 家作ね、それで生活をしてた訳です。

本地 貸してられたんですね。

佐々木 お祖父さんが亡くなって、質屋をおばあちゃんがやってたんですけど、それも出来ないからやめて、子供二人とおばあちゃんとかで、家作で生活してました。

本地 今で言う不動産管理のようなことは、嘉信さんがやってらしたんですか。

佐々木 やってないでしょうね、判らないけど…。

本地 私は嘉信さんから、「月末は忙しいんだよ」と、月末にお会いしようとする度に何度かそう言われることがあったんですが…。

佐々木 そうなんですか、じゃあ何か手伝ってたのかしら…。

本地 その辺はご存知ないですか。そうすると佐々木さんが嘉信さんと一緒に生活されていたというのは何時までになりますか。ご結婚されるまででしょうか。

佐々木 そうです。

本地 失礼ですけれど、ご結婚は何年にされましたでしょうか。

佐々木 昭和36年かな。よく兄弟で話しをすとか言いますけれど、私は兄とはそんなに話さなかった。一番下の弟はかわいくていつも話したり、祖母ともしょっちゅう話しては、一緒によく浅草へ行ったりしましたね。

◎私は、柔道への挑戦…。

笹沼 お兄さんとお話して一番思い出に残っていることなど、ございますか。

佐々木 嘉信とですか、特には無いんです。

紙屋 お兄さんと映画を観た記憶とか、一緒に映画館に行った記憶とかも

佐々木 行かない行かない。

佐崎 逆にお兄さんが佐々木さんのことを、こういうふうにした方がいいよとか

佐々木 そんなの言わない言わない。だから私は私で26年だったかな、柔道始めたの(笑)、10年間くらいやってました。

一同 柔道！

佐々木 そう結婚してやめたんだけど。当時は女子が柔道をするのは少ないから話題になって、雑誌などにしたりしたんだけど、兄はなんとも言わないの、出たんだねとも(笑)。

本地 柔道はお強かったんですか。

佐々木 強くはないけれど、女性が少なかったからね。

本地 女性では珍しかった…。

佐崎 その雑誌は残ってないですか。

佐々木 残ってる(笑)。

佐崎 ちょっと見たいですねっ！

佐々木 いちばん初めは『アサヒグラフ』だったの(雑誌を探して下さい)。

本地 僕は女の兄弟がいないから判らないけれど、女の兄弟と男の兄弟とは余り遊ばないものなのかな。

笹沼 兄弟によりますよね。

紙屋 私は小さいころは遊びましたよ。

佐々木 (ご自身の載る雑誌をお手にして)これが私。…これは柔道の雑誌…。

入江 これはテレビ番組の写真ですね。

佐々木 昔のね、高橋豊子(高橋とよ)のトーク番組へ出たとき。

入江 いっぱいありますね…。

佐々木 あ、『アサヒグラフ』が出てきた、これが初めて…。

岡田 52年、昭和27年ですね。「柔、豪を制す」…。

佐々木 懐かしい。こういうふうポーズをとって…、これ、私…。

一同 お～(笑)。

笹沼 どうして柔道をしようと思われたんですか。

佐々木 あのね、電車に乗るときにバナナの皮ですべっちゃったの。

紙屋 えっ、そんな漫画みたいにすべっちゃったんですか？

佐々木 そうなのよ(笑)。当時はバナナなんて貴重でね。それで転んで整形外科に通っていたら、その先生が講道館で柔道をやっていたの(笑)。

紙屋 受け身も習ったんですね(笑)。

佐々木 当時は『週刊ベースボール』や『月刊スポーツアイ』って、スポーツ雑誌が盛んでね。

紙屋 柔道は何年くらいやってらしたのですか。

佐々木 10年です。学校から帰ると直ぐ柔道の練習に出かけて行くもんだから、私はそんなに兄とも話すことがなかったんです(笑)。

本地 なるほど、それはそうだ(笑)。

佐々木 私が出て行く時、釧持さんがご飯食べていたりして「行ってらっしゃい」って言われたりしてね(笑)。昔はこういうふうに…(技を決めた写真が大きく載るグラビア誌を見て)あっ、これ恥ずかしいっ！

一同 おっ！すごい！

紙屋 かわいい！

入江 「柔ちゃん」だ！

佐々木 あれ、今日はおうちの兄貴の話するんじゃないかった？(笑)。

笹沼 こちらの資料が充実してまして(笑) 見入っちゃいますね。

佐々木 引越しとかそういうのしていないから残ってるのよね。

岡田 講道館って、春日でしょう、この辺だから。

佐々木 その当時は水道橋にあったんです。

本地 活躍されてたんですね。

佐々木 この雑誌は鉄道弘済会にあって、その当時はそんなに売り物も無いから、同じ雑誌を一ヶ月くらい売ってたの。だからずっと売店にあって恥ずかしかった。

佐崎 有名人だったんじゃないですか。映画に来て下さいとか、そういうのもなかったですか。

佐々木 有名じゃないのよ、ただもう恥ずかしくて、笑っちゃうわね。でも、親がこうして雑誌をまとめてとって置いてくれたのね。…今日は兄貴の話だからこれでこれはおしまい(笑)。

本地 これらの雑誌などは、佐々木さんだから、ということで取材に来られたんですね。

佐々木 当時、昭和28年にテレビが始まってね。

佐崎 そのころは嘉信さんより佐々木さんの方が有名でしたね。

紙屋 テレビにご出演されたのは、高橋豊子がやっている番組なんですね。

入江 その時も番組で柔道の話がされたんですね。

佐々木 そうそう、当時テレビは生放送だったのね。

紙屋 ゲストとして、佐々木さんのお名前がテロップに出ていますね。

岡田 ほんとだ、ほんとだ。「講道館柔道二段、塚田裕子さん」って書いてあります。

入江 よっぽどですね、これは。

本地 このテレビの画像を写されたのは嘉信さんですか。

佐々木 だと思う(笑)。そんな話はしないんだけどね、父親ではないと思うから。

◎日頃の嘉信氏のこと、思い出、など…。

岡田 思いがけない話をお聞きしました。

本地 そうしますと、ご結婚されて、佐々木さんは同じ敷地の別の棟にお住まいになられたのですか。

佐々木 ええ、そうです。

本地 それだと嘉信さんとはあまり行き来は無くなりますね。

佐々木 そんな行き来とか考えてなかったですね。

本地 と言いますのも、嘉信さんは昭和36(1961)年くらいから凄いい勢いで本格的に研究や資料収集を始められています。

佐々木 だから弟が一所懸命に手伝って…。

本地 弟さんは普通の会社員をされていたんですか。

佐々木 そう、丸運（丸運輸送株式会社）という運送会社でした。

本地 先ほど、弟さんも亡くなられたと…、そうしますとご兄弟は佐々木さんだけになってしまわれたんですね。

笹沼 ねえ、弟さん去年亡くなられたって…。びっくりしました。

佐崎 われわれもお会いしてますよね。

岡田 そうです、嘉信さんの資料を運ぶ際にお会いしていますね。

本地 来てらした…。これは前の家の2階の部屋の拡大写真なんですが。



旧宅の2階の部屋での塚田嘉信氏。
ガラス戸の中に並んでいる雑誌は『週刊新潮』と思われる。

佐々木 ああ、マンションじゃなくて前の家の時のね。

本地 ええ、私は嘉信さんとお話する時はいつもここに案内して下さって、このガラス戸棚があってそこに『週刊新潮』がずらっと並んでいました。2階の部屋でしたが、階段を上がって行ってすぐ左にお部屋があって、そこでいつもお話していました。

佐々木 そうなのね、倉庫みたいなところの上ではないのね。うちは元質屋をやっていたから1階に鉄の扉があったり…。この写真の兄は若いわね、懐かしい。

本地 嘉信さんは資料を私に見せて下さる為に、ときどき玄関の扉をガラッと開けて出て行ってました。

佐々木 鉄の扉がついた蔵みたいな倉庫から持って来ていたんじゃないかな、大事なものは。

本地 いつもどこに行かれたのかなと思ってましたが、そんなこと聞けないし(笑)。

佐々木 その蔵の前で、本を買ってきたらいつも日光消毒みたいな虫干しをしていましたね。でも、本地さんの方がいっぱい兄の資料を持っているわね、私は全然無いの…。

本地 私は古本屋で働いていた時に、嘉信さんと知り合ったんです。神田に古書会館というところがあって、そこで開催する古書即売会でいつも嘉信さんは本を買われていたと思うんですが、そういうところへ早くから通われていたというご記憶はありますか。

佐々木 私はそういう記憶は無いけれども、そういうことだったんでしょうね。

本地 足繫く通われてました。

佐々木 うちから近いから尚更でしょうね。

本地 ここに住まわれているとき、嘉信さんが映画を観るのは浅草ですか。

佐々木 そこまで兄に聞いたりしたら、うるさいって言われちゃうわね。どこ行ったっていいじゃないかって(笑)。

本地 「浅草は便利なんだよ、上野からすぐ出られるから」って言ってましたので…。

佐々木 そんな映画の話は私とはしないから。

佐崎 お齡も離れているから、ちょっと怖い感じなんですか。

佐々木 怖くはないです。

佐崎 では、冗談を言ったり…。

佐々木 冗談とかは余り言わないわね。結婚していればまた違ったかもしれないですが(笑)。

佐崎 そういうお話もあったんですか。

佐々木 無いですけど(笑)。

本地 そうすると嘉信さんは、松竹のお仕事されたあとはお勤めには出られなかったということでしょうか。

佐々木 マンションの管理の仕事があったからね。

本地 管理されてましたものね、下の事務所に詰められて。

佐々木 ええ、一所懸命にね。なんかすごく悩みながら、新館の増築の時なども。

本地 これもお聞きになっておられないかも知れませんが、田中栄三さんという古い日活の人ですが、お名前をお聞きになったことは…。

佐々木 あのアテネフランセにいたかたはどなたでしたか。

本地 吉田智恵男さんですね。

佐々木 吉田さんと、小間物屋さんやっておられた方。

本地 御園さんですか、御園京平さん。

佐々木 御園さんですね、その3人ではよく会ってたわ。

入江 もしかしたら月村さんとお呼びしていたかも知れません。

佐々木 ああ、本名は月村さんね。

本地 ここにもよくお見えになってたのですか。

佐々木 来ていたかどうかは。私はうちを出てるから判らないけれど、話はよく聞いていましたよ、御園さんのことと吉田さんのことはね。

入江 それは嘉信さんの口から出てくるお名前だった訳ですね。

佐々木 そうそう。

本地 「御園さんは地主ですごいお金持ちだから」って、嘉信さん良く言ってたなあ(笑)。

入江 嘉信さんは、子供の時もけっこう静かな方だったのですか。

佐々木 おばあちゃん子だったの。

佐崎 お祖母さんと言うのは、母方のですか。

佐々木 そう母方の。私が小さい頃にまだ学校行く前に、夏休みの一箇月くらいを祖母が鎌倉に家を借りて、そこでいろいろ遊んだ記憶があります。そのとき兄はどうだったかなあ。

入江 嘉信さんが『映画資料発掘』をご自分で出されたとか、後で『日本映画史の研究』という本を出されたといったことは、ご家族の皆さんはご存知だったのでしょうか。

佐々木 何かそういうことをしているというのは判っているけれど、いちいち聞くと「うるさいなあ」なんて言われちゃうから(笑)。

入江 「本を出したよ」みたいなことも言われなかったですか。

佐々木 言わない言わない(笑)。私のことも言わないし、自分のことも言わないの。

入江 直接は判らないんですね。

佐々木 そうそう。

本地 嘉信さんはお医者さん嫌いだったみたいなんですけれど、

佐々木 ああ、嫌いでしょうねえ。しょっちゅう行っていたから、子供の時からね。

本地 私がいちばん最後にお会いした時に、足の具合が悪いんだっておっしゃってたんですけど、何かご病気だったというのは判らないですか。

佐々木 さあちょっと、私は離れていたから判らなくてね。

本地 坂道を歩いていると、足が止まらなくなっちゃうんだって言って、私が「お医者さんに行って下さいよ」と言うと、なんか余り…。

佐々木 やだーって言うんでしょ？(笑)。

本地 嘉信さんってすごく紳士でしたよね。

佐々木 そーお？(笑)。

本地 すごくきっちりされていて…。

佐々木 きっちりしてるのはそうね。

本地 だから生活もすごくきっちりされている方だったんじゃないですか。

佐々木 面白くないでしょ？映画以外は何にもしないから(笑)。友達はみんな映画関係の人みたい。

本地 ただ古本屋によく通われていた分、あらゆる分野の本に通じられていましたよ。

佐々木 ああ、それはそうでしょうねえ。目に入りますものね。

本地 マンションになる前のお宅のときには、やっぱり家じゅうに本がありましたか。

佐々木 そうだったみたいだけど、どうだったかなあ。

本地 すごい量の筈ですよ。

佐々木 まあ、映画一辺倒だったわね(笑)。

入江 佐々木さんがご結婚される前、まだ一緒に嘉信さんと暮らされていた頃のお部屋の様子は記憶ございますか。映画の本がいっぱい並んでいたというような。

佐々木 ちょっと、覚えていないわねえ。

本地 映画のお仕事をされていた部屋は別にあったということでしょうか。

佐々木 この父の「私の一生」に間取りを書いてなかったかしら。

岡田 「現在住んでいる住居を掲載しておく」と書いてますよ。

佐崎 間取りがありますね、これが蔵ですね。

笹沼 大きい！

本地 けっこう大きいね。さっきの写真の部屋がどこかもわかりますね。

入江 良かったですね、間取りの図面が書いてあって。

佐々木 私は2階にはそんなに上がったことがなかったからね。

岡田 「昭和52年に書いた」と書かれていますね。

本地 資料を持って来られる時に、玄関をガラって開けて出て行かれるから、別棟に何か書庫でも建っているのかなと思っていましたが、この図でよく判りますね。

岡田 お父様の記録はすごいものがありますね。

本地 半端じゃないね。

大傍 嘉信さんは、お父さん譲り。

本地 やっぱりお父さん譲り。こういうところはお父さんの血を引いているんですね。

紙屋 お写真見ると、お父様は芸事が好きなようですね。

佐々木 そうなの、この辺り花柳界だから。赤羽の方に踊りも習いに行っていました。

岡田 「昭和3年に常磐津を習ったけれど、嘉信が生まれたのでやめた」と書かれています(笑)。

紙屋 嘉信さんはそういう習い事というのはやってらしたのでしょうか。

佐々木 やってないんじゃないかな。私もお三味線を習ったけれどお師匠さんに断られたの、やる気ないからダメだって(笑)。

紙屋 柔道で目が出て(笑)。

本地 この「私の一生」をお父様が書かれている姿はご覧になっているのですか。

佐々木 無いです、見つけたのは亡くなってからでしたから。

本地 私とお会いしていたときも、嘉信さんはご家族ご兄弟のことは一切お話になりませんでした。

佐々木 一切言わないでしょ。

本地 私も聞きもしなかったんですが…。

佐々木 突っ込んだことを聞いて折角の関係がこわれたら嫌よね。そう、兄は何にも言わないの。

本地 嘉信さんに、「直接教わったような、或いはお付き合いされている先輩の映画史の研究者のことを書いておいて下さい」って、言ったことがあったんですけど、「そういうのも書いておかなきゃねだめだね…」という反応でして、結局書かれませんでした。

佐々木 そうなんですね。

本地 塚田さんの研究仲間の中では、塚田さんがひと世代もふた世代も若い方だったので。

佐々木 兄が何か書いているということはだいたい判りますけれど、どういう人とどういうお付き合いという具体的なことはちょっと…。

本地 マンションになって、管理人をされているときに下で映画の調べものをなさっていた訳ですよ。

佐々木 ええ、やっていたんでしょう。でも幸せな一生ね、自分の好きなことをやってね。

本地 でも、幸せっていうのとも…ちょっと違うような。自分にもものすごく厳しかった方だと思いますよ。何て言うんでしょうか、例えば他に遊びたいこととか、こういうことやりたい、或いはこういう本も買ってみようかということは一切ご自分でこうシャットアウトして、映画史の基礎の研究に集中したという感じですが…。普段は優しいお兄さんでしたか。

佐々木 そうね、そんなに喧嘩なんかしないで。男の兄弟同士はよくやってたけれど(笑)、親は黙って見てるの。

紙屋 どんなことで喧嘩されていたんでしょう。

佐々木 何だか判らないけれど喧嘩してたのね。障子に穴が開いたり、床の間に投げたもので傷ができたりしても、そのまんま(笑)若い頃ね。

佐崎 男兄弟ならありますよね。

佐々木 上の兄とはそんなに齢も離れてないからね。私は女で、下の弟は齢が離れているからね。

佐々木 うち親に何にも言われなくて良かったの、口うるさい親もいるでしょう。

一同 (笑)。

本地 私が初めてこちらへお邪魔させて頂いたのは1980年、昭和55年です。だから42年前です。

佐々木 そうですか、昭和55年頃だと、ここのマンションはまだ無かったのね。

本地 はい、前のお宅へは何回もお邪魔させて頂きました。

佐々木 終戦後バラックから建てた家で、こう時代劇に出てくるような入口だったわね。

本地 ガラガラガラって引き戸を開けて、ですね。

佐々木 そうガラって開けてね、障子紙なんか貼ってあってね。その頃はそういうのが恥ずかしいなあって思っていました。

本地 そうですか(笑)。嘉信さんと初めてお会いしてから何年かの間は、私は電話を引いていなかったんです。その頃は電話の契約って結構高かったから、だから全部手紙の遣り取りで残ってるんです。嘉信さんも私が出したものを全部残して置いて下さっていました。

佐々木 それは良かったわね。

本地 ただ、今、自分の出した手紙を読むとすごく馴れ馴れしく書いているので、恥ずかしくて嫌になっちゃって(笑)。

佐々木 いいんじゃない(笑)。

入江 僕は本地さんと塚田さんが交流されていて本当に良かったなと思っていて、そのおかげでこうやってバトンタッチが出来ているんです。

佐々木 兄も喜んでるわよ。

本地 まさか、まさか、です。本当に。

佐々木 まさかまさか、ほんと。

本地 岡田さんから嘉信さんの資料を受け入れるという電話をもらった時、耳疑いました。信じられなかった…。

佐々木 何かご縁があったのね、皆さんと。

本地 でも、遺された資料がものすごく濃密なので、整理もまだまだ入口の段階かと思います。

紙屋 でもかなり解明されて来てはいますよね。

入江 失礼な話かも知れませんが、嘉信さんが亡くなられてから、その後に資料を見せて下さいという方もいらしたのでしょうかね。

佐々木 あったけれど、上の部屋にはあげなかったわね。兄も上へは絶対上げなかったわね。

本地 上げないですね。

佐々木 何しろ資料に対しては厳しかったわね。絶対見せない。私は、そんなに厳しくなくてもいいんじゃないって思っちゃいますが(笑)。

本地 でも私はよく見せて頂きました。後になってから、そういうことを他の方から聞いて、ええっ?と思ったんですが…。

佐々木 ほんとにね、皆さんのおかげでこうして整理して下さっているから、有難いです。本当にどうしようかしらと思ってましたから。でもね、もうちょっとね兄のことを判っていれば良かったなあ…、でも話さないからなあ。

紙屋 本当に残されたものを見てみると、志半ばだったのかな、というのをすごく感じます。やりたいことはまだまだ沢山おありだったのでは、と思います。頭の中には色々な構想がいっぱいあったんだろうなあ…。

本地 やりたいこと、と言うよりは「やるべきこと」だったと思う。「やるべきこと」が「やりたいこと」だった。そういう使命感の強い人だから…。

佐々木 でもこれだけやってあげればもういいでしょう、本人にも。もう趣味で適当にやってた方が楽かな…(笑)。

[終]

謝辞：本研究はJSPS 科研費 20K00164 の助成を受けたものです。